



SENSHOJI
2021 YUKARI NEWSLETTER
since 1994

ゆかり通信
VOL. 285
令和 3 年 10 月

北海道千歳市清水町1-14 鶴寶山 千正寺
TEL:0123-23-2442 FAX:0123-24-9883
ホームページ <http://sensho-ji.net/> フェイスブック @Senshoji

2021年千正寺カレンダー 10月の言葉



幸
せ
は
「
な
る
」
も
の
じ
や
な
く
「
気
づ
く
」
も
の



柿

20代の頃、僕は「一生懸命働いて、立派な人になって、将来幸せになりたい」と思っていました。しかし、現実はそう甘いものではありませんでした。当時ホームセンターの売り場担当者として働いていましたが、去年必死の思いで出した売り上げ成績を、今年はさらに超える事が常に求まられました。

「こんなに頑張ってるのに、なぜ幸せになれないんだろう…」とずっと思っていました。そんな時、進められて読んだのが、「飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ」という本でした。

井村和清さんという医師が、悪性腫瘍のため右足を切断し、妊娠中の妻と子を残し、32歳の若さで亡くなるまで綴った手記。それが彼死後、出版されベストセラーになりました。その中に、「あたりまえ」という詩があります。

あたりまえ

こんなすばらしいことを、みんなはなぜよろこばないのでしょう。あたりまえであることを。お父さんがいる。お母さんがいる。手が二本あって、足が二本ある。行きたいところへ自分で歩いてゆける。手をのばせばなんでもとれる。音がきこえて声ができる。

こんなしあわせはあるでしょうか。しかし、だれもそれをよろこばない。あたりまえだ、と笑っています。

食事がたべられる。夜になるとちゃんと眠れ、そして又朝が来る。空気をむねいっぱいにする。笑える、泣ける、叫ぶこともできる。走りまわれる。みんなあたりまえのこと。

こんなすばらしいことを、みんなは決してよろこばない。そのありがたさを知っているのは、それを失くした人たちだけ。なぜでしょう。あたりまえ。

20代の頃には、ピンと来なかったこの詩が、仏教を学び50代となった今ではジーンと胸に染みてきます。育ての親の爺ちゃんも婆ちゃんも、父も母もみんなみんなお淨土に往生した今。僕がどんなに愛されて育ててもらったか、痛いほど良く分かります。阪神淡路大震災…あの時、死んでいても何の不思議もないのに、今夜もこうして家族と美味しく食卓を囲んでいます。髪は大分薄くなり、薄い所を隠すために整髪時間がちょっと長くなりましたが、あの日亡くなってしまっていたら、若い僕の写真を見ながら、家族はどんなに切なく悲しい思いをしたでしょう。

幸せは「なる」ものじゃなく、「気づく」ものなんですね。幸せはもう与えられているのかも知れませんね。なのに、「まだまだ欲しい！もっと欲しい！」と欲望を募らせる愚かな私たちに向かって阿弥陀様は、「あなたのいのちは生かされて生きているいのちなのですよ。とてつもない大きな恵みを頂いているいのちなのですよ。そのことに目覚めて下さいね」と呼び続けて下さいます。その呼声が南無阿弥陀仏なんです。

失う前に「気づく」ことが出来たなら、僕たちの毎日はどれほど輝いて見えることでしょう…南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏…。（文：桜庭尚吾法務員）